大会　第２日

１０月２日（日）

研　究　発　表

１０月２日(日) 研 究 発 表

第６分科会　　会場：７号館１階　１０４教室

司会 ： 軽部 勝一郎（熊本学園大学） 熊澤 恵里子（東京農業大学）

〔26〕 9:00　学制期の府県教育会議に関する研究

湯川 嘉津美（上智大学）

〔27〕 9:30　開拓使函館支庁における公立学校設置策の展開

井上 高聡（北海道大学大学文書館）

〔28〕10:00　東北地方の中等教育再編と第二高等中学校との接続に関する研究

小宮山 道夫（広島大学）

〔29〕10:30　高等学校令施行後における高等普通教育の変容

吉岡 三重子（お茶の水女子大学・院）

〈総合討論〉 11：00～11：30

第７分科会　　会場：７号館１階　１０３教室

司会 ： 大矢 一人（藤女子大学） 三上 敦史（北海道教育大学）

〔30〕 9：00　占領下沖縄群島における六・三・三制の成立要因
—教科書事情を中心に—

萩原 真美（お茶の水女子大学・院）

〔31〕 9：30　戦後日本における夜間中学の成立過程

江口 怜（東北大学）

〔32〕10：00　名古屋市立朝鮮学校の設置・存続・廃止
—外国人学校と教育の公共性—

呉 永鎬（世界人権問題研究センター）

〔33〕10：30　高度経済成長期後半から低成長時代にかけての「混血児」教育
—包摂の教育から包括の教育へ—

上田 誠二（横浜国立大学・非）

〈総合討論〉 11：00～11：30

第８分科会　　会場：７号館１階　１０１教室

司会 ： 清水 康幸（青山学院女子短期大学） 白取 道博（横浜国立大学）

〔34〕 9：00　1930 年代「長野県教員赤化事件（「二・四事件」）」の研究
前田 一男（立教大学）・越川 求（千葉県立保健医療大学）

〔35〕10：00　海軍飛行予科練習生制度発足の経緯と背景
―海軍航空学校案をめぐる議論を中心にして―
白岩 伸也（筑波大学・院）

〔36〕10：30　国民学校令下の「少年団錬成」論に関する一考察
―「共励切磋」を目指す少年団常会論に着目して―
須田 将司（東洋大学）

〔37〕11：00　戦時下の神学校
―日本基督教団に対する文部省の統制―
大島 宏（東海大学）

〈総合討論〉 11：30～12：00

第９分科会　　会場：７号館２階　２０１教室

司会 ： 佐野 通夫（こども教育宝仙大学） 向野 正弘（向野堅一記念館）

〔38〕 9：00　清末民初の中国社会における女学校運動会
浅沼 千恵（東北大学・院）

〔39〕 9：30　清末国内知識人による「学堂楽歌」運動の展開
―常州の音楽講習会を中心に―
班 婷（広島大学・院）

〔40〕10：00　「満洲国」におけるモンゴル民族の女子教育とその特徴
―興安女子国民高等学校を事例に―
劉 迎春（京都大学・院）

〔41〕10：30　戦前・戦時中におけるモンゴル人の留日教育研究
―善隣高等商業学校を中心に―
何 広梅（お茶の水女子大学・院）

〈総合討論〉 11：00～11：30

第10分科会　　会場：７号館２階　２０２教室

司会 ：　小松 佳代子（東京藝術大学）　中村 雅子（桜美林大学）

〔42〕 9：00　アメリカ合衆国盲教育史にみる盲人の覚醒と社会変革の系譜
―S.G.ハウからR.B.アーウィンへ―
岡 典子（筑波大学）

〔43〕 9：30　20世紀転換期イギリスの学校医療サービスの発展
―ロンドン学校診療所の活動に注目して―
増田 圭佑（広島大学・院）

〔44〕10：00　20世紀初頭イギリスにおける優生思想の展開と子ども
―優生教育協会の活動に着目して―
草野 舞（九州大学・院）

〔45〕10：30　20世紀初頭イングランドの大学成人教育におけるソーシャル・ワーク教育
―ウッドブルック・カレッジとバーミンガム大学の連携を中心に―
土井 貴子（比治山大学短期大学部）

〈総合討論〉　11：00～11：30

１０月２日(日) 研 究 発 表

第 11 分科会　　会場：７号館１階　１０４教室

司会：　笠間 賢二（宮城教育大学）　柏木 敦（大阪市立大学）

〔46〕13：00　函館・谷地頭のアイヌ学校生徒の、釧路・春採の学校への派遣について
小川 正人（北海道博物館アイヌ民族文化研究センター）

〔47〕13：30　1923 年から 1936 年における北海道開拓政策下の初等教育の実態
坂本 紀子（北海道教育大学）

〔48〕14：00　20 世紀初頭神奈川県六浦における地域社会の再編成
―三分小学校訓導長島重三郎の活動を通して―
真辺 駿（横浜国立大学・院）

〔49〕14：30　戦前昭和期山形県における実業補習学校改革に関する一考察
―「実業公民学校」の設置について―
三羽 光彦（芦屋大学）

〈総合討論〉　15：00～15：30

第 12 分科会　　会場：７号館１階　１０３教室

司会 ：　吉川 卓治（名古屋大学）　山崎 奈々絵（聖徳大学）

〔50〕13：00　新制大学発足時の「大学における教員養成」の具体化過程
―東北大学初代教育学部長細谷恒夫の履修基準案の検討を中心に―
久恒 拓也（広島大学）

〔51〕13：30　小川芳男著『英語教育法』(1963 年)の英語教育史における意義
惟任 泰裕（神戸大学・院）

〔52〕14：00　1960 年代後半の職業高校における小学科の多様化
―政策をめぐる言説と多様化の実態―
山田 宏（一橋大学・院）

〔53〕14：30　戦後教育学における歴史と民族
―上原専祿の「国民教育」論―
山田 真由美（慶應義塾大学・院）

〈総合討論〉　15：00～15：30

第13分科会　　会場：７号館２階　２０１教室

司会 ： 駒込 武（京都大学） 古川 宣子（大東文化大学）

〔54〕13:00　植民地台湾における先住民の初等後教育
—女性の進学とその前後—
北村 嘉恵（北海道大学）

〔55〕13:30　公学校高等科家事教科書における衣服教材と台湾人の衣生活
—和服・洋服・本島服に着目して—
滝澤 佳奈枝（お茶の水女子大学・院）

〔56〕14:00　1940年代朝鮮における青年の動員
樋浦 郷子（国立歴史民俗博物館）

〔57〕14:30　米軍政期の韓国における教育政策と宗教
白 恩正（創価大学・非）

〈総合討論〉 15：00〜15：30

第14分科会　　会場：７号館２階　２０２教室

司会 ： 尾上 雅信（岡山大学） 渡邊 隆信（神戸大学）

〔58〕13：00　ドイツ帝国の学校儀礼
—大日本帝国三大節学校儀礼モデルの可能性(1870〜1918)—
小林 亜未（フンボルト大学・院）

〔59〕13：30　デュルケームのリセ・ド・サンス講義にみる論理的な知の教育
—フランス第三共和政前期の中等教育界—
綾井 桜子（十文字学園女子大学）

〔60〕14：00　西ベルリン・ノイケルン区所有の学校田園寮に関する研究
—東西分裂時代のヴァンゼー別荘で存続した学校田園寮—
江頭 智宏（名古屋大学）

〔61〕14：30　1960年代香港の少年犯罪
山田 美香（名古屋市立大学）

〈総合討論〉 15：00〜15：30

大会　第２日

１０月２日（日）

コ ロ キ ウ ム

１０月２日(日) コロキウム１

会場：７号館１階　１０４教室　15：40～18：00

「外地」中等教員ネットワークの形成過程
―広島高等師範学校を中心に―

オルガナイザー　山本 一生（上田女子短期大学）
報告者　杉森 知也（日本大学）
山下 達也（明治大学）
松岡 昌和（秀明大学・非）
角 能（東京大学）
槻木 瑞生（同朋大学名誉教授）

〈趣旨〉

公立「近代学校」の特徴の一つとして、教師は教育職員として資格を有し、かつ定期的に勤務校を異動することにある。では、帝国日本の版図拡大と教員ネットワーク形成との関係はいかなるものであったのか。そこで本研究は、広島高等師範学校を中心に描くことを目的とする。なぜ広島高師を研究対象とするのか。それは、教員ネットワークの拡大を意図的に行っていたと考えるためである。

片岡徳雄・山崎博敏編『広島高師文理大の社会的軌跡』(財団法人広島地域社会研究センター、1990年）によると、東京高師や帝国大学の卒業生が全国に「学閥」を形成していたが、広島高師は後発校であったため新設校に広島高師卒業生の校長が現れるとそこを足掛かりとして尚志会員教員が集まり学閥が形成されていったと指摘する。広島高師が新設校を中心に学閥を形成していったという指摘は重要である。植民地、領有地が増える毎に、「内地人」用の新設校が建てられ、新規に教員を採用する需要が生じ、そこで新規教員市場の開拓が必要となるからである。

つまり、帝国日本の版図拡大と「内地」の教員養成校による新規教員市場の開拓との関係を考察する上で、広島高師を対象とすることが求められるのである。そこで本コロキウムでは、『広島高等師範学校一覧』での卒業生動向をベースに、以下の観点からこの課題に取り組む。なお資料の関係から 1938 年までを研究対象とする。

① 広島高等師範学校卒業生の「外地」赴任
② 広島高等師範学校と植民地朝鮮
③ 広島高等師範学校と南方　ほか

１０月２日(日) コロキウム２

会場：７号館１階　１０３教室　15：40～18：00

幼児教育における「遊び」と「学び」
―プロジェクト活動の史的展開を手がかりに―

オルガナイザー	太田 素子（和光大学）
報告者	浅井 幸子（東京大学）
	浜田 真一（白梅学園大学大学院）
	太田 素子（和光大学）
指定討論者	椨 瑞希子（聖徳大学）
	里見 実（国学院大学名誉教授）
	古沢 常雄（法政大学名誉教授）
司会	阿部 真美子（聖徳大学）

〈趣旨〉

1980 年代から 90 年代にかけて、西欧では乳幼児の保育施設の量的な拡大がすすみ、就学前教育が生涯学習社会の基盤的な役割を果たすことに理解が広がった。またひき続いて、学校教育との関係を射程に入れて、量的に拡大した乳幼児保育の質の向上に強い関心が向けられた。日本における少子化への対応は ゆっくりとした歩みではあるが､保育の量的な拡大と質への関心とがいま同時進行で課題化している。

欧米で 90 年代から注目を集めた幼児教育実践の一つに､子どもの表現の中からその関心を汲み取り、能動的かつ知的なテーマをもつグループ活動として発展させてゆく、レッジョ・エミリア・アプローチがある。北イタリアの小都市で生まれたこの実践は、J. S. ブルーナーや P. モスなど国際的な共同研究者の後押しもあって、世界的な広がりを持つようになってきた。スウェーデンでは、９０年代半ばに保育が社会福祉省の管轄から教育省に移行し、その時期から、レッジョ・アプローチに刺激を受けたプロジェクト活動を重視する保育が展開されてきている。

このコロキウムでは、プロジェクト・アプローチの思想と実践を、戦後日本のプロジェクト型保育と比較しながら、幼児教育における「学び」の意味を深めたいと考えている。
J. デューイやキルパトリックに起源を持つプロジェクト型の幼児教育は、日本では大正自由教育によって移入・実践され、戦後も再び多様な展開を遂げた。戦後日本における実践の発展について、レッジョ・アプローチと比較しつつ理解を深めたい。

報告は、浅井「三層構造論と幼児教育カリキュラム――プロジェクト・メソッドの受容と展開」、浜田「レッジョ・エミリア・アプローチの誕生とその特質」、太田「レッジョ・インスピレーションとスウェーデンの幼児教育」、指定討論にヨーロッパの新教育・幼児教育を専攻する椨瑞希子、古沢常雄、レッジョ・アプローチを生み出した思想家マラグッツイの伝記を紹介した里見実を予定している。

１０月２日(日)　コロキウム３

会場：７号館１階　１０１教室　15：40～18：00

日本教育史研究の系譜
―佐藤秀夫の研究論考・教育史史料研究・教育史史料公開―

オルガナイザー　逸見 勝亮（北海道大学名誉教授）
　　森川 輝紀（福山市立大学）
報告者　小野 雅章（日本大学文理学部）
　　小川 正人（北海道博物館アイヌ民族文化研究センター）

〈趣旨〉

◇海後宗臣は、「教育勅語の成立をもって、天皇制を絶対化する教育の仕組がつくられて、半世紀にわたる日本の教育を決定したと簡単に論述しておくことはできない。教育勅語成立以後の奉体や問題については稿を改めて著述したい」（『教育勅語成立史の研究』私家版、1965 年、399 頁）と述べている。佐藤秀夫は、「わが国小学校における祝日大祭日儀式の形成過程」（『教育学研究』第 30 巻第 3 号、1963 年 9 月）、『続・現代史資料　教育　御真影と教育勅語 1～3』8～10（みすず書房、1994～1996 年）等を著し、海後が課題とした「教育勅語成立以後の奉体や問題」の著述をなし、海後に連なる日本教育史研究の個性的な系譜を刻んだ。

◇佐藤は、「日本近代教育史に関する研究史料の考察―制度政策関係の官側文書史料を中心として」（『日本の教育史学』第 13 集、1970 年）において、『文部省日誌』、『文部省示諭』、『法規分類大全』、『太政類典』、『公文類聚』、臨時教育会議・文政審議会・教育刷新委員会・教育刷新審議会関係史料―後にいずれも佐藤が主導して公刊した―に関する教育史史料としての価値を論じた。さらに、「本稿の作成にあたっては、……「日本近代教育百年史」編集事業の成果に負うところが大きかった」（163 頁）と述べている。官側史料を駆使した『日本近代教育百年史』第 3・4 巻（国立教育研究所、1974 年）の佐藤執筆箇所を繙けば、「研究史料の考察」は通説に挑んだ論争的な研究論稿の達成と相即していることは明瞭である。佐藤は、研究論考は「史料研究の「副産物」（『教育の文化史』1、阿吽社、2004 年、ⅲ頁）と述べているが、研究論考・史料研究の達成と史料公開は佐藤の真髄である。

◇佐藤における「研究論考・教育史史料研究・教育史史料公開」を共有するには、「わが国小学校における祝日大祭日儀式の形成過程」と「日本近代教育史に関する研究史料の考察―制度政策関係の官側文書史料を中心として」が必読文献となろうか。

◇とまれ、小野雅章・小川正人両氏に自在の報告を御願いした。

小野雅章：佐藤秀夫と日本教育史研究――史料公開・研究方法・研究指導
（1. 史料研究と史料集編纂――史料公開の原則／2. 研究方法と史料研究／3. 研究指導のスタンス）

小川正人：佐藤秀夫と教育史資料―アイヌ教育史への関心と提言をいとぐちに
（1. 1980 年日本教育学会における佐藤秀夫報告／2. 教育史資料に対する佐藤秀夫の構えかた）

１０月２日(日) コロキウム４

会場：７号館２階　２０１教室　15：40～18：00

近代日本における教育情報回路と教育統制（５）
―地方教育会の屋台骨・校長会の活動実態の分析―

オルガナイザー　梶山 雅史（岐阜女子大学）
報告者　清水 禎文（東北大学）
梶山 雅史（岐阜女子大学）

〈趣旨〉

本コロキウムは，2005 年第 49 回大会以来、”教育情報回路としての教育会の総合的研究”をテーマとして企画を重ね、第 12 回目の設定となる。今回は、全国各地、地方教育会組織の中核・実質的担い手として機能していた校長会の活動実態に照明を当てる。「教育会は何であったのか」との問いを深めていく上で不可欠の研究課題である。大正 15 年 7 月地方官官制の全文改正によって郡役所・郡長廃止以降、教育行政機関が補い得ない業務の代替、問題処理に向けて、地方教育会の組織と機能が変化してゆく。戦前・戦中・敗戦直後、各エポックで府県・郡教育会の組織・活動の具体的屋台骨を担った校長会の実態はどのようであったか。そして戦後新教育への模索・転換の舞台に立ったのも校長会組織を構成する人物群であった。群馬県と岐阜県の事例を検討したい。

1. 清水報告　本報告は、明治 30 年代に成立する小学校校長会の組織と活動を、郡市レベルにおいて検討する探索的研究である。対象時期は昭和初期から戦後初期とし、郡市レベルの小学校校長会が国家の政策を積極的に担い取るに至る過程を分析する。その際、校長会が牽引し、地方教育会が掲げ続けてきた「教権」独立論と国家の教育政策を末端において遂行することとの矛盾、相克に焦点を当てたい。

   主たる分析対象は､戦前に全国小学校長会副会長を務めた田部井鹿蔵が長年に亘り会長を務め、強力なリーダーシップを発揮した群馬郡ならびに農会や衛生会などの地域における諸会と密接な関係の下に発展を遂げてきた邑楽郡とする。全国的な動向、また全県的な動向を踏まえつつ、これらの郡における校長会、そして地方教育会の特質を明らかにする。

2. 梶山報告　岐阜県の恵那郡教育会と私設恵那郡小学校長会にスポットを当て、両者の関係に考察を加える。1926 年 6 月、 郡制廃止に伴う最終の小学校長会において、将来郡内小学校教育事務の研究協調を保つために、「私設恵那郡小学校長会」が結成された。郡制廃止以後は広域の岐阜県校長会が新たに組織されることになるが、恵那地域では、敢えて私設の校長会が結成されるに至った。以後地域に密着した教育事業が紡がれていくことになる。

   恵那郡教育会には 1930 年代「興村教育」で全国的に注目された西尾彦朗が存在した。西尾は 1935 年岐阜県視学に転出、1941 年には恵那郡中津国民学校長として再び恵那郡に赴任し、恵那郡国民学校長会長、恵那郡教育会長を務める。戦後は発足当初の岐阜県教育委員会の委員長に選出される。西尾が活躍した恵那郡教育会の戦中、戦後の歩みは実に注目に値する。恵那郡教育会の解散のプロセスを丁寧に辿り、恵那郡教育振興会ならびに恵那郡教育研究所が立ち上がっていく歴史的背景と六三小学校長会の動きを掘り下げてみたい。